



Title	高齢者の自立に焦点をあてた老年看護学実習の展開 : 観察能力の強化と教育方法の検討による学生の認識の変容
Author(s)	高橋, 順子; 林, 裕子
Citation	看護総合科学研究会誌, 12(1), 3-14
Issue Date	2009-12-28
DOI	https://doi.org/10.14943/43509
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42799
Type	journal article
File Information	JCNR12-1_3-14.pdf



高齢者の自立に焦点をあてた老年看護学実習の展開 —観察能力の強化と教育方法の検討による学生の認識の変容—

高橋順子¹⁾ 林 裕子²⁾

1) 北海道大学大学院教育学研究院 博士後期課程

2) 北海道大学大学院保健科学研究院

Development of Gerontological Nursing Focusing on the Self-Reliance on the Elderly People

—Transformation of Recognition of Students by Strengthening Observation Ability and Education Method—

Yoriko TAKAHASHI

(The Doctoral Course, Graduate School of Education, Hokkaido University)

Yuko HAYASHI

(Faculty of Health Sciences, Hokkaido University)

要 旨

本研究は、老年看護学実習（以下、「実習」とする）前の講義における観察能力の強化と意図的な指導方法により、実習後の学生に生じた「高齢者の自立」に対する認識の変容を明らかにする事を目的とした。対象者は実習終了後の学生47名であり、インタビューによって高齢者の自立をどのようにとらえたか聞き取った。語られた内容は、意味内容に基づきコード化し、認識の変容に着目して分析した。結果、従来の高齢者の自立への認識は、【自分のことは自分でできる】、【1人で生活すること】等であった。しかし実習終了後の高齢者の自立の認識は、【小さな、細かいことにも自立がある】、【意識や認識、気持ちだけでも】等の認識の変容が見られた。これらは、実習前の講義、実習における指導の工夫によるものと推測される。よって、実習において高齢者に内在する能力の維持、拡大につながる看護能力を養う事は、教育の方法等により可能であると確認された。

キーワード：高齢者，自立，看護学生，老年看護学実習，認識の変容

I. はじめに

V. ヘンダーソンによれば看護は「各人の基本的欲求が充足されるように自立を目指して生活行動を援助する活動」¹⁾であり、金井はナイチンゲールの思想をベースとして「その人の持つ力が最大限に発揮できるようにしながら、生活の自立とその質の向上を図る」²⁾と述べる。また井上らは、看護を健康の保持・増進、健康

の回復、あるいは安らかな死のために、個人がその家族を含めて、自立して日常生活ができるように援助することであり、究極の目的は看護の対象となる人の自立を助けること³⁾であると明言している。これらのことから看護における対象者の自立は、中心的課題であり、重要な概念としてとらえることができる。

一方近年における高齢者の自立に関しては、

高齢者の健康寿命をのばし、要介護状態を防ぐ「自立支援」への取り組みが広がりをみせている⁹⁾。また高齢者にとっては、疾病の有無よりも自立した生活を過ごせることの方がはるかに「健康」としての意義を持ち、高齢者のQOLにとってより重要なのは「生活機能の自立」である⁵⁾とされている。

しかしながら、疾病や障害により自ら自立した生活を送ることが困難となった要介護高齢者の多くは他者からの援助を受けつつ施設や病院での生活を余儀なくされている。そのため日常生活機能のみの自立に着目した場合、高齢者は意欲のない患者と判断されたり、無理に自立を要求される⁶⁾という弊害を招きかねない。またこのような高齢者は、安静臥床を必要以上にとった場合、筋力低下や、廃用症候群をおこしやすく、合併症などにより経過が長引きやすい⁷⁾とされている。そのため、身体機能の低下しやすい高齢者にとって、持ち得る能力を意図的に活用するケアがなされなければ、高齢者の生活機能が全面的に失われる恐れ⁸⁾があり、容易に寝たきりという状況に陥る危険性さえはらむことになる。したがって、高齢者の持ち得る能力を最大限に活用する看護を目指すには、疾病や障害を持つ要介護高齢者にこそ、その対象者に見合った自立を看護の中心的概念として認識する必要がある。すなわち日常生活機能における要介護高齢者の自立への目標設定を、潜在する能力や身体機能から吟味すると同時に、その能力を意識的、目的的に引き出す高度な観察と実践が求められていると言える。

翻って高齢者の自立を看護基礎教育における老年看護学との関連で見ると、老年看護学の教育目標ならびに学習目的・目標を分析した結果によれば、生活自立に向けた援助を掲げている大学は50%にとどまっていた⁹⁾。また清水ら¹⁰⁾は、教員が臨地実習で大切にしていることが「高齢者の理解」と「他職種との関連の中で看護の本質的な役割機能を学ぶ」ことであったと結論づけている。すなわち、一般的には看護基

礎教育においては高齢者の基本的な理解に重点がおかれ、「疾病や障害を持つ高齢者の自立」を意識的に目標にすえて教育の展開がなされていると考えにくい現状がある。

さらに学生は、老年看護学実習（以下「実習」とする）において障害や疾病を有し、何らかの援助を必要とする要介護高齢者（以下「高齢者」とする）と関わることが多い。その場合において、顕在化する問題状況にとられるあまり、高齢者に内在する能力を見出すことに苦慮し、高齢者の自立という意味さえ理解し難い状況であることが指摘¹¹⁾されている。ゆえに学生が高齢者の自立を目指す看護を展開するには、高齢者に内在する能力を見出す観察力だけでなく、その能力を維持あるいは向上させていくという「見えにくい自立」に向かう柔軟な発想が求められる。

しかし、学生が従来とらえてきた一般的な自立の概念を用いた目標設定では高齢者に内在する能力を引き出し、拡大していくことにはならない。なぜなら入所、入院している高齢者の多くが身体可動性や認知機能の低下をきたし、退院や回復が必ずしも目標とはならないためである。また学生にとっては、高齢者が全てに援助を求めなければならない存在として映ることさえある。そのため、一般的な自立に固執した場合、目標と現状の乖離が生じ、対象者にあった自立をめざした看護を展開するには至らず、むしろ自立の可能性を阻むことにさえなり得る。そこで高齢者の自立概念を、一般的な自立の枠組みを超え、極めて個別、流動的な高齢者の自立概念としてとらえ直す必要がある。そのためには、高齢者に内在する能力の意図的な観察と、高齢者の自立を明確に意識付けるための取り組みが求められる。したがって研究者らは、学生たちが実習において意識的に「高齢者の自立」を思考しながら高齢者の能力を観察し、高齢者にとっての自立を考察しうる教育の方法を模索した。

よって本研究において、老年看護学における

講義ならびに実習という一連の教育課程の中で高齢者の自立を目指すという課題を核として、学習者に意識的な観察と自立の概念を思考させる教育を展開した。その結果、学生が老年看護学実習を通して高齢者の自立をどう認識し、学びを深めることができたのか、その効果について明らかにし、高齢者の自立を目指す実習展開に有効な教育方法について検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象者

A看護系大学4年次に在籍し、老年看護学実習終了後に同意を得られた学生とした。4年次における老年看護学実習は、介護老人保健施設または介護療養型医療施設に入所する高齢者1名を受け持ち、3週間で看護を展開する実習であった。また対象となった学生は、他領域の実習として、3年次の段階で基礎看護学実習、成人（急性期、慢性期）看護学実習、母性看護学実習、地域看護学実習を終了している。

2. 老年看護学における教育内容、教育方法の工夫

対象学生は、2年次の老年看護学概論において「高齢者の自立」は、従来の自立概念とは異なる広い概念であることが教授された。また3年次の老年看護学援助論（15時間1単位）において、認知症高齢者の生活動作場面のビデオ視聴後、認知症高齢者の行動を経時的に記載する課題を終了した。次に3年次の老年看護学実習Iにおいて、実際に対象者の行動を30分間にわたり観察、経時的に記載した。その上で中島¹²⁾の身体技法の概念を用い、対象者の行動が、高齢者の自立にどのように影響するかを分析し、自立に向けた看護について考察させた（表1）。

さらに4年次の老年看護学実習における教育方法として次のような指導計画を教員間で共通認識し、実践した。1週目には、受持ち高齢者と日常生活援助を通して関係性を構築することと、高齢者が現在受けている援助とその背景をとらえること、またその際には受持ち高齢者の内在する能力に着眼できるように、詳細な観察を試みることを主眼とした。2週目には、1週目に引き続き受持ち高齢者の内在する能力に着眼するとともに、様々なアプローチを実施する事により、高齢者に潜在する日常生活能力や可

表1 A看護系大学における老年看護学の学習展開(高齢者の自立に関わる学習課題の抜粋)

年次	講義科目	時間(単位)	概要(抜粋)	実習	時間(単位)	概要(抜粋)
2年次(後期)	老年看護学概論	15(1)	高齢者の自立概念への理解			
	老年看護学健康論	15(1)	援助を必要とする高齢者への紙上看護過程の展開と演習			
3年次(前期)	老年看護学援助論	30(2)	健康障害を持つ高齢者のビデオ視聴と中島の身体技法を用いた観察記録の実施			
3年次(後期)				老年看護学実習I	30(1)	中島の身体技法を用いた要介護高齢者の行動観察記録の実施
4年次(前期)				老年看護学実習II	90(3)	要介護高齢者への自立を目標とした看護展開

表2 4年次老年看護学実習における指導要領(概略)

	1週目	2週目	3週目
実習課題	対象者との関係形成	対象者の潜在能力を引き出す関わり	2週目の看護計画に対する評価と修正
	対象者の潜在能力の観察	対象者のケアに対する反応や状況を高齢者の自立を念頭に置きながらケアを実践し、日々評価する	対象者の自立に向けた看護計画の立案
	対象者が実際に受けているケアを計画し、実践する		対象者の反応や状況に合わせて自立に向けた看護を展開する
指導における留意点	学生が、対象者の能力に着目した観察や、アプローチができてきているかの確認と助言指導	学生が、ケアの実践を通して対象者にとっての自立を模索し、思考されているかの確認と助言	対象者の自立に向けた看護計画が妥当なものであるかの臨床側との確認と指導
	対象者が実際に受けているケアの背景(根拠)をとらえているかの確認	「対象者にとっての自立は何か」の問いかけ	

能性を引き出すことを中心課題とした。加えて、日々の実践の中で、受持ち高齢者にとっての自立がどのようなもの(状況)であるかを常に思考させるような指導を心がけた。3週目には、受持ち高齢者の自立を目指した看護計画の立案と実践を求めた。すなわち受持ち高齢者の自立とは何かを、従来の発想にはとらわれずに思考し、対象者にとっての自立を目指し、看護を展開することを課題とした(表2)。

3. 調査内容と方法

調査は、4年次の老年看護学実習を終了し、承諾を得られた学生に対して、高齢者の自立をどのようにとらえたか等に対する自由な語りを求め、高齢者の自立への認識を半構成的に面接した。面接はプライバシーが保たれる個室とし、面接内容は対象者の同意の下録音し、後に逐語録を作成した。

4. 用語の操作的定義

自立とは、一人の独立した人格としての社会的承認と保障への要求であり、それにふさわしい社会的人格に向けての自己形成を含むものである¹³⁾。また自立した生活とは、その人の残存能力を十分に発揮しながら生活していくことであり、そのための意思決定を自ら行い、日常生

活における他人への依存を最小限にしていく方策を選択することによって、自己の生活を管理していくことである¹⁴⁾。しかし実習においては他者に生活の援助を受ける必要のある高齢者を対象とするため、依存と自立のバランスをとりながら生活する¹⁵⁾状態としての「高齢者の自立」も加味されなければならない。よって本研究における高齢者の自立は、依存することを含む高齢者に内在する生活能力(自己選択と決定を含む)を維持、拡大することまたはその状態と定義づける。

5. 分析方法

調査協力の得られた47名のインタビューをもとに逐語録を作成した。「高齢者の自立をどのようにとらえたか」について語られた内容を意味内容に基づいて抜き出しコード化した。また類似するコードを集めサブカテゴリーとし、さらに抽象度を上げカテゴリーとした。

またカテゴリー化するにあたっては、実習以前から、実習において高齢者と対峙するまで自立として抱いていた認識について語られているものと、実習を通して高齢者の自立についての認識に至った内容に注目して分類した。分類にあたっては、研究者間で一致するまで検討を重ねた。

6. 倫理的配慮

対象となったすべての学生に対し、調査の目的、調査は老年看護学の成績入力後に実施されるため成績とは一切関係しないこと、断ったとしても不利益をこうむることはないこと、個人情報特定されることはないことを口頭及び紙面により明示した。その上で同意と署名を得られた学生を対象とした。また研究、調査にあたってはA大学倫理委員会の承認を得た。

III. 研究結果

1. 対象者の概要

対象となった学生の性別は男子学生6名、女子学生41名の合計47名であった。学生の背景として、高齢者との同居経験（1ヶ月以上）のある者は19名、同居経験のない者は28名であった。受持ち高齢者の状況としては廃用症候群、脳梗塞後片麻痺、神経難病等による身体可動性の低下があり、日常生活の一部あるいはほとんどに介助を要する高齢者が47名であり、そのうち中等度から重度（柄澤式「老人知能の臨床的判断基準」において中等度～最重度まで）の認知

症を有する高齢者が31名であった。インタビューは一人の学生に対し1回とし、一人当たりの面接時間は15分～30分程度であった。

2. 「高齢者の自立」についての認識

47名の対象者に対する「高齢者の自立をどのようにとらえたか」の回答から、意味内容に基づいた105のコードが得られた。それらを分析した結果、『実習前の高齢者の自立への認識』と『実習後の高齢者の自立に対する認識』の2つのコアカテゴリーが抽出された。『実習前の高齢者の自立への認識』には【自分のことが自分でできる】、【一人で生活すること】、【高齢者には難しい】の3つのカテゴリーが析出された。また、『実習後の高齢者の自立への認識』として【小さな、細かいことにも自立がある】、【意識や認識、気持ちだけでも】、【できることの維持、だんだんできるようになること】、【1日の流れ、バランス】、【援助を受けてできる事】という5つのカテゴリーが得られた（表3）。以下コアカテゴリーを『 』、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》、実際に語られた内容を「 」と記載する。

表3 高齢者の自立をどのようにとらえたか(学生の認識)

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
実習前 の高齢者の 自立への 認識	自分のことは自分でできる	全く介助されずに自分で行動できる
		何かの動作が全てできること
	一人で生活すること	独居生活を送る
	高齢者には難しい	高齢者だと簡単にはいかない
実習後 の高齢者の 自立への 認識	小さな、細かいことにも自立がある	小さなことや、動作の一部分だけでも
		最低限生活を送ることだけでも
		自立につながる小さな動作を見極める
	意識や認識、気持ちだけでも	必要な介助を意志表示や選択できる
	していることを意識したり、気持ちや認識だけでも生きてきた背景やその人の考え	
できる事の維持、だんだんできるようになること	できることや機能を低下させず維持すること	
	できることを少しでも増やしていくこと	
1日の流れ、バランス	生活のリズムをつけて1日を過ごせること	
	体力的なバランスを取りながら過ごすこと	
援助をうけてできること	介助を受けながらもできること	
	持っている力を出せること	

3. 『実習前の高齢者の自立への認識』

『実習前の高齢者の自立への認識』として【自分のことは自分でできる】の категорияには《全く介助されずに自分で行動できる》, 《何かの動作が全てできること》の2つのサブカテゴリーが見られた。《全く介助されずに自分で行動できる》には「実習前までは自分でできることが自立だと考えていた」, 「全く介助されずに自分のことが自分でできる」の内容が見られた。《何かの動作が全てできること》には、「最初自立といたら動くことを考え付いたのですけれども、全介助で寝たきり状態だった」や、「今までは自分で何かの動作が全てできることが自立だと考えていた」の内容が見られた。同時に実習において実際に出会った対象者が、「寝たきりであり、全てを介助されて生活していた」状況への驚きと「この方にとっての自立って何だろう」という戸惑いが表出された。また【1人で生活すること】の categoriaには、《独居生活を送る》のサブカテゴリーが抽出され、「自立イコール独居と考えて」おり、「自ら立つと書くので、自分たちの年代だと親から自立する状況だと考えていて」という理解があったと述べられた。【高齢者には難しい】の categoriaにおいては《高齢者だと簡単にはいかない》のサブカテゴリーがあり、「高齢者はそう簡単にいかないし、完全に1人でできることが自立じゃないということを、あっそうなんだと思っただけ」の内容があった。

4. 『実習後の高齢者の自立への認識』

実習後の高齢者の自立への認識において、【小さな、細かいことにも自立がある】、【意識や認識、気持ちだけでも】、【できることの維持、だんだんできるようになること】、【1日の流れ、バランス】、【援助を受けてできること】の5つの categoriaが析出された。

1) 【小さな、細かいことにも自立がある】

【小さな、細かいことにも自立がある】の categoriaには《小さなことや、動作の一部分だけでも》, 《最低限生活を送ること》, 《自立

につながる小さな動作を見極める》の3つのサブカテゴリーが抽出された。《小さなことや、動作の一部分だけでも》のサブカテゴリーには「何々ができるではなく、少しずつ段階的に踏んでいって、とても細かいことができたというだけでも自立だと思った」, 「私たちがしてしまうと介助になることでも、患者さんが（櫛を）持った手でとかすというだけでも違う。小さなことでも自立があるということを知った」, 「実習の中ではほとんど自分でできることがなかったのですが、口をあけることだったり、目配せをすることだったりができる」, 「食べるために口を開けてもらう、歯磨きのために口を開けてもらうってことができること自体が自立なんだ」が見られた。また《最低限生活を送ること》には、重度認知症で全てに介助が必要である高齢者を受け持った学生の「日々生活を送ること自体が自立。最低限生活を送ることが自立だと思いました」との内容があった。さらに《自立につながる小さな動作を見極める》には、「ちょっとの動作もできるところを見てといわれて、そうやって見るとズボンの上げ下げだけではできるとか、そういった細かいところまで目に付くようになって」や、「3年の授業で身体技法の観察をやって、それを意識しながら観察していたら、髪をとかす以外の動作にもすごい細かい動作で、分けてみたらできるところが少しずつ見えてくると感じて」と講義を振り返っての内容も見受けられた。

2) 【意識や認識、気持ちだけでも】

【意識や認識、気持ちだけでも】の categoriaでは、《必要な介助を意思表示や選択できる》, 《していることを意識したり、気持ちや認識だけでも》, 《生きてきた背景やその人の考え》の3つのサブカテゴリーが見られた。《必要な介助を意思表示や選択できる》には「何でも自分でできるようになるではなくて、介助が必要なのは自分でわかって介助者に伝えられる」, 《していることを意識したり、気持ちや認識だけでも》では、「患者さんは、自分で体を動か

すことがあまりできない状態なので、意識とか気持ちの上でも自立ということはある」などの内容が見られた。また《生きてきた背景やその人の考え》には「できるできないだけでなく、裏にあるその闘病生活とか人生の中でそういう考えに行き着いたことを把握する」の内容が確認された。

3) 【できることの維持, だんだんできるようになること】

【できることの維持, だんだんできるようになること】のカテゴリーには、《できることや機能を低下させず維持すること》、《できることを少しでも増やしていくこと》の2つのサブカテゴリーが見られた。《できることや機能を低下させず維持すること》には、「ほんの少しのことでもできることへの維持の部分であらためて学ぶことができた」があった。《できることを少しでも増やしていくこと》には「入れ歯渡せば本当は入れられるので、ちっちゃなことでも見つけてあげて、一人の人ができることを少しでも増やしていく、ちょっとずつでも増やしていくのが大事」が見られた。

4) 【1日の流れ, バランス】

【1日の流れ, バランス】のカテゴリーでは、《生活のリズムをつけて1日を過ごせること》、《体力的なバランスをとりながら過ごすこと》の2つのサブカテゴリーが抽出された。《生活のリズムをつけて1日を過ごせること》には、こちらから働きかけなければ、日常生活を送ることができない重度認知症高齢者を受け持った学生が「私どうしたらいいの?」と問いかける日々の中で、「何々ができるといよりも、1日24時間をどのように過ごすかということも自立だと」述べていた。《体力的なバランスをとりながら過ごすこと》には、90代の高齢者を受け持った学生が、「機能的にできるけれども、それを全てやったら対象者さんが疲れてしまうということも一番大きくて、そのバランスをうまくとること」、「機能的なところとは違う要素の既往とか、体力的なところも合わせて見てい

くことが大事」と疾患によって配慮しなければならない事に考えを巡らせる内容もあった。

5) 【援助を受けてできること】

【援助を受けてできること】のカテゴリーには、《介助を受けながらもできること》、《持っている力を出せること》の2つのサブカテゴリーがあり、《介助を受けながらもできること》には、「援助することを含めた形でどうしていくかということ」、「誰かの協力を得てできることも高齢者にとっての自立」が見られた。《持っている力を出せること》には「たとえ介助を受けた中でも、介助を得ながらも持てる力を出していくというのも高齢者にとっての自立になる」という内容が見られた。

IV. 考察

3週間という実習期間を通して、学生たちの従来の「高齢者の自立」に対する認識には、一般的な自立とは異なる「高齢者の自立」というあらたな認識の広がりや概念の構築があったと考えられた。その背景として教育内容、教育方法の一連の工夫による影響が示唆された。その過程について以下の視点から考察する。

1. 教育内容, 教育方法の工夫と高齢者の自立の概念構築

本研究において、「高齢者の自立」への学生の認識の拡大が認められたその背景には、老年看護学の教育内容と教育方法の一連の工夫の影響があることが考えられた。すなわち、老年看護学の講義における高齢者の自立概念の説明や、観察記録の実施により、高齢者の看護を展開するには「自立」という明確な目的を持つ必要があることが動機付けられたと考えられる。3週間という短期間においては、とすれば高齢者の理解に終始する可能性も考えられるが、学生たちが、ほとんど自分でできることのなかった高齢者であったとしても、「口をあけることだったり、目配せをすることだったり」も自立につながるのだと見出せたことは、こうした素地が少なからず影響したと考えられる。また3年次

の老年看護学実習において、実際の要介護高齢者の言動や行動を詳細に観察し、考察したことが、本研究の対象となった4年次での実習において、それぞれの対象者を通して個別性豊かな自立の認識へと発展するための基礎となった可能性が考えられる。

1) 高齢者の自立概念の拡大

高齢者の自立の概念を従来の枠にとどまらない広い概念であると老年看護学の講義において明示し、実習においては学生の受持ち対象者を通して「高齢者の自立」という概念を模索するよう投げかけたその結果、多様な高齢者の自立を認識するにいたった状況が明らかとなった。

例えば【1日の流れ、バランス】の категорияにおいて、自力で日常生活を組み立てることのできない認知症の高齢者を受け持った学生が、生活の流れの一つ一つを言葉で伝え、誘導することによって、混乱なく1日を過ごす事ができ、そのことがすなわち認知症高齢者の自立への支援になるのだと認識していた。また、「体力的なバランスを取りながら過ごすこと」において、全てできることを高齢者の自立として目指すのではなく、体力的、既往歴などを考え合わせながら見ていかなければだめなのだとして認識するに至っていた。さらに【援助を受けてできること】、【意識や認識、気持ちだけでも】の2つの categoriaには、ノーマライゼーション思想と自立生活運動と言われる障害者にとっての「自己決定」こそが自立であるとする考えと類似する認識が見出された。すなわち身体機能が障害されていたとしても、支援を受けることによって、また支援を受けたいと考える気持ちや意識だけでも自立になるのだと考えていた。これらは、高齢者の自立を身体機能、日常生活動作に限定することなく、精神的な側面にも見出そうとした結果であると考えられることができる。特に全介助で寝たきりにある高齢者であっても、「していることを意識したり、気持ちや認識するだけでも」と考えられる状況は、日常生活動作や機能的な能力にとどまらない自立概念を見出

せた内容と考えられる。

このような高齢者の自立への認識の広がりや、図1に示したように、従来の自立への認識であると考えられる身体的、精神的、社会的自立への3つの方向を矢印で示した自立へのベクトルから多様な方向へと変化した。すなわち獲得している自立の矢印が小さくなり、あるいは依存の方向へ向かったとしても、それでさえ高齢者にとっては残された機能を最大限に発揮する自立であり、高齢者の自立への看護の基本的な概念となるものである。このような様々な方向へのベクトルの拡大は、学生にとって高齢者の自立に関する認識の変容であると考えることができ、自立概念の再構築への布石となった可能性が示唆された(図1)。

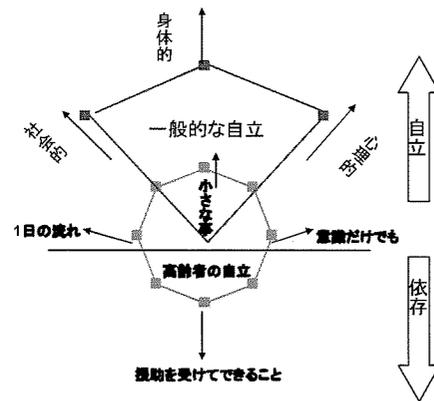


図1 一般的な自立と高齢者の自立概念図

2) 細かな観察と能動的、意識的な見方

【小さな、細かいことにも自立がある】における「小さなことや、動作の一部分だけでも」には、ほとんど自分でできることのない身体可動性の低下した高齢者であっても、「口を開けることだったり、目配せをすることだったり」とわずかに残された身体機能に注目し、意識的に観察する様が語られていた。また、身体的機能、日常生活動作における直線的な自立ではなく、その下位概念として食事動作の前提となる「口を開けること」や、髪をとかせなくても「櫛を持てる」という動作に注目していること

が確認できた。これらの観察は、日常生活動作を一連の動作の集合というまとまりで見た場合に、「自力で食事ができない」、「整容動作を一人ではできない」という「自立していない生活動作」と認識される。しかし、その動作の細部に注目し、一つ一つの動きに分解すると、はじめて「できる部分」が浮き彫りになる。このような状況は、受け持ち高齢者の観察を通して学生たちが、高齢者の能力を見出し、その中でも自立があるのだと考えられたエピソードであるととらえることができる。すなわち講義や実習における指導方法として意図した結果を得ることができたと考えられ、高齢者の能力を意識的、目的的に引き出すことにつながる観察の基礎になるものである。

《自立につながる小さな動作を見極める》には、「身体技法を意識しながら観察」することによって、「できるところが少しずつ見えてきた」と述べられたように講義の中で教授された知識をもとに実践し、発見に結び付けられている状況が確認された。これらは実習の場面において、既習の知識を想起させ、実践に活用できていると考えられるものであり、単に観察するというだけでなく知覚経験として処理されている¹⁹⁾過程であると見ることもできる。すなわち事象の表面的特徴よりも事象の意味を知覚する¹⁹⁾ことに近似する状況であるように考えられる。事象としての口を開けること、目配せをすること自体は無意識に近い動作であっても、ほとんどできることのない対象者にとっては、意志を持った意味のある貴重な事象であるのだと学生が知覚したのではないかと考えられる。さらに、「櫛を渡すとかせる」、「ズボンの上げ下げだけはできる」といった内容からは、意識的に能動的な観察をしている状況も見出されていた。すなわち学生は対象者にとってできない、あるいはできにくい動作であると観察しながらも、初めから介助するのではなく、一歩立ち止り、こうしてみたらどのように反応するのか、もしかすると動かせるのかも知れないと小さな

問い直しをしている。クラントン¹⁸⁾はものの見方を束縛しているのは、自分が前提を作っていることや、その前提の問い直しができることに気づいていないことであると述べている。学生は、観察したことの前提にたつてその問い直しを行い、その前提を正確に見つめ直そうとしている。そしてその結果、対象者の潜在的な能力に気づきを得ていた。このような状況は、老年看護学の講義や3年次の老年看護学実習Iにおける身体技法を用いた高齢者への観察とその記録の成果と見るができる。さらに、その詳細な観察を通して意識的に能動的な観察へと結び付けられたことは研究者らの予測を超えた成長であった。

2. 高齢者の自立の概念を再構築するための礎

実習を通してとらえた「高齢者の自立」の語りを求めた中で、学生たちはあえて「実習前の高齢者の自立への考え方」と対比させ述べている状況が見られた。それらは実習を終えて、自らの認識が何らかの変容を遂げたことを示唆していると考えられる。例えば【自分のことは自分でできる】、【一人で生活すること】、【何かの動作が全てできること】の実習前の高齢者の自立に対する考え方の3つのカテゴリーには、自立への認識を、社会生活を営んでいく上で必要となる身体的機能、生活動作能力に限定してとらえていた様子が確認された。このような自立への認識は、学生たちが成長過程の中で体験してきた事柄であり、これまでの実習の中でも対象者の社会復帰や疾病の回復過程における看護の中で常に目指してきたことであると言える。

しかしながら、本研究における対象学生の多くは、身体機能、認知機能に障害を抱え、日常生活に何らかの援助を必要とする高齢者を受け持ち、従来の「自立」に対する認識では、対処することができない状況に直面していた。すなわち「寝たきりに近い対象者の自立とは何か」という認知的な葛藤状態に置かれたということが考えられた。

梶田は、人が2つ以上の認知構造の間にズレ

や不一致が生じる時、概念的葛藤状態に置かれ、それを低減するために自ら情報を求めようとする」と述べている¹⁹⁾。よって本研究の対象学生たちにおいても、従来考えていた「高齢者の自立への認識」が、受け持ち対象者と対峙し、実習を展開していく過程において、一度批判的に省察され、あらためて深く洞察するにいたった状況が推察された。また佐貫²⁰⁾は、受験学力によって見失われた学習意欲が、新しい学習観の形成にとっての大きな壁であると述べ、学生たちが直面する問題の一つが学習そのものの目的の喪失であるとする。しかしながら、先に述べた2つ以上の認知構造のズレから生じる「概念的葛藤状態」が、学習者の知的好奇心を喚起し、能動的な学習へと向かうことにつながったのではないかと考えられる。すなわち、「高齢者の自立とは」の投げかけが、従来の学習観を転換する新たな学びとの出会い²¹⁾となり、目指すべき高齢者にとっての自立の概念を再構築するための礎となったことが推察される。

V. 結論

老年看護学における教育内容と教育方法の一連の工夫により、老年看護学実習を終了した学生が高齢者の自立への認識を、どのようにとらえたのかを明確にし、高齢者の自立を目指す看護展開における学びを深めるための教育方法について考察した結果、以下の結論が得られた。

1. 老年看護学実習前の、教育内容、教育方法の工夫によって、実践や現象を省察し、高齢者に内在する能力を見出すための有効な手段となりうると考えられる。
2. 学生は、概念的な葛藤状態におかれることにより、深い洞察を得ようと能動的に学習し、効果的な認識の変容がなされる可能性がある。
3. 一般的な自立ではなく、高齢者の自立を模索するという明確な課題を持つことは、批判的な思考を喚起し、あらたな高齢者の自立概念の拡大を促す事が示唆された。

引用文献

- 1) V. ヘンダーソン, 小玉香津子ほか訳: 看護の基本となるもの, 11, 日本看護教育出版会, 1973.
- 2) 金井一薫: KOMIチャートシステム・2001, 現代社, 18, 2001.
- 3) 井上幸子, 平山朝子, 金子道子: 看護の概念と看護の歴史, 看護学体系 第1巻 看護とは [1], 3-23, 日本看護協会出版会, 1994.
- 4) 笠井恭子, 吉村洋子, 寺島喜代子: 介護予防拠点施設を継続利用している高齢者の生活と施設における体験, 老年看護学, 13(1), 5-12, 2008.
- 5) 井口昭久: これからの老年学[第二版], 名古屋大学出版会, 48, 2008.
- 6) 小川理恵, 相川富士子, 鶴沢珍衣他: 老人の自立について考えるー自立に対する老人患者, その家族, 看護者の意識調査ー, 第4回日本看護学会集録集(老人看護), 113-115, 1993.
- 7) 堀内ふき, 大淵律子, 金子昌子: ナーシング・グラフィカ26 老年看護学ー高齢者の健康と障害, メディカ出版, 9, 2005.
- 8) 井口昭久: 前掲書, 267.
- 9) 高橋順子: 高齢社会における看護福祉論構築への一考察ー北海道を事例にー, 北海道大学大学院 教育学研究科 修士論文, 83, 2004.
- 10) 清水初子, 水戸美津子, 流石ゆり子: 看護系4年制大学における老年看護学臨地実習の実態と課題, 山梨県立看護大学紀要, 1(1), 41-53, 1999.
- 11) 高橋順子, 林裕子: 老年看護学実習の初期における学生の困難ー疾病や障害を持つ高齢者の自立に向けた観察の視点ー, 看護総合科学研究会誌, 11(2), 15-23, 2009.
- 12) 中島紀恵子: 系統看護学講座 専門20 老年看護学, 医学書院, 7, 2006.
- 13) 坪井良子, 松田たみ子編: 基礎看護学 考

える基礎看護技術Ⅰ 看護技術の基本, ヌー
ヴェルヒロカワ, 54, 2002.

- 14) 同上書, 54.
- 15) 谷田恵美子: 高齢者の自立と自立への援助
— 高齢者ケアに携わる人へのアンケート
調査—, 吉備国際大学保健福祉研究所研究
紀要, 創刊号, 47-62, 2000.
- 16) U・ナイサー: 人文 社会叢書Ⅰ 認知の
構図 人間は現実をどのようにとらえるか,
サイエンス社, 16-17, 1997.
- 17) 同上書, 16-17.
- 18) P・クラントン: おとなの学びを創る, 鳳
書房, 152, 2004.
- 19) 梶田叡一: 教育心理学への招待, ミネルヴァ
書房, 70, 1995.
- 20) 佐貫浩: 知的探求の自由, 株式会社教育史
料出版会, 27-29, 2000.
- 21) 同上書, 28.

Development of Gerontological Nursing Focusing on the Self-Reliance on the Elderly People

—Transformation of recognition of students by strengthening observation ability and education method—

Yoriko TAKAHASHI

(The Doctoral Course, Graduate School of Education, Hokkaido University)

Yuko HAYASHI

(Faculty of Health Sciences, Hokkaido University)

Abstract

The objective of this study is to examine the educational methods of clinical practice of gerontological nursing aiming at the self-reliance of elderly people with disabilities for nursing students. The procedure was as follows: Prior to the practice, educational methods were devised to strengthen the observation capability of the nursing students. Thereafter, they were interviewed after the practice with respect to their evaluation of the self-reliance of the elderly. Subsequently, the obtained results were classified according to their similarity.

As a result, contradictory to the notion of self-reliance previously harbored by the students, their concept regarding the elderly was confirmed to have expanded. This therefore suggested that the practice is conducive to the nursing which can draw out the potential of the elderly.

Key words : elderly people, self-reliance, student nurse, clinical practice of gerontological nursing, directing attention to changes